



実利に迎合し政策が動く、 ご都合政治の危うさ モディに待ったをかける女性 ママタ・バナジー



ママタ・バナジー

インド・ビジネス・センター代表 島田 卓

続く農民の抗議デモ 存在感増すインドのジャンヌ・ダルク

昨年から続き終息の見通せないデリー首都圏での農民の大規模スト。似た現象は2008年にも起きている。タタ・モーターズが発表した超低価格車「ナノ」(10万ルピー、当時約2190ドル)の工場建設時だ。西ベンガル州政府はタタに対し、州都コルカタ(旧カルカッタ)郊外のシングルの土地1000エーカー(約405万㎡)をタダ同然の超破格値の提供に加え、低利融資、安価な電力の供給、12.5%(当時)の付加価値税の10年間免除等を提示し、工場誘致を図った。これに乗ったタタは工場建設に入ったが、農地没収に遭った4万人近くの現地農民が蜂起、工場建設現場に押し寄せ工事は中断、工場建設は頓挫した。

この時の首相は、いま最大野党の国民会議派(INC)のマンモハン・シン首相で、雇用創出と景気対策のため自動車産業振興の旗を振っていたが、農家の実情にお構いなしの政策実行に批判が集中した。

これに乗じて勢力を拡大したのが、現在、西ベンガル州政府を率いる全インド草の根会議派(AITMC)党首で、いま同州首相の座に就くママタ・バナジー女史(66歳)だ。

バナジーは1997年、政治信条の違いからINCを離脱すると、生まれ故郷のコルカタに戻り、現与党インド人民党(BJP)を軸とする国民民主同盟(NDA)に加わった。その後、インド最後の左翼戦線で当時の州政府を率いたインド共産党マルクス主義派(Marxist)が進めていた上述タタ・ナノ生産工場の建設に反対する農民の先頭に立ち同プロジェクトを中止に追い込んだ。2011年にはINCとよりを戻し州議会選挙で大勝、バナジー州政権を樹立した。しかしその後、ディーゼル価格引き上げや小売業外資規制緩和政策に反旗を翻し再びINCと袂を分かち、今は第三勢力(中間政党)となっている。

バナジーは一貫して農民や貧困層に寄り添う姿勢で勢力を伸ばしており、中央政府が強引に進める産業改革や農業改革の大きな壁となっている。バナジーは質素を貫き、非常に謙虚な姿勢を見せる一方、激しい政治気性を持つ。また、カルカッタ大学でイスラム歴史学修士を取り、後に同大学から名誉博士号(文学)も授与されているインテリだ。

札束でモディが繰り出す懐柔策 権力欲は人を狂わすのか

国民会議派にとって代わり2014年の総選

挙で予想を覆す勝利を取めたBJPは、モディ首相の下「開発・発展」を錦の御旗とし、翌2015年、英国統治下の1894年に制定された「土地収用法」を、政府がより広範囲な分野で強制土地収用ができるように改訂しようとした。が、北部穀倉地帯に位置するパンジャブ州農民などの反対に遭い、断念している。その際の農民主張は、「貧しい農民を守るのではなく、大企業寄りの政策実施」で、「そんな改革のために、先祖代々の土地を失うのなら命を賭して戦う」というものであった。昨年から続く農産物取引の自由化を中心とした農業新3法導入に対し、反発とデモを繰り返す農民の気持ちも同じだろう。

だが、首相2期目に入ったモディは土地収用法の改正を諦めてはいない。多数派工作にあの手この手を使っている。二院制のインドの下院はBJPが過半を押さえているものの、上院(245議席、欠員4で過半数は123議席。2020年10月8日現在)は、BJPを中心とする与党連合が118議席と、過半数に5議席足りないねじれ状態となっている。

モディと彼の右腕であるアミット・シャール内務相、BJP総裁のJPナッダは、中間政党を貫いてきた西ベンガル州や、テランガナ州、オデッシャ州の懐柔に乗り出した。インド上院の勢力図では第三勢力としてのAITMCが13議席、オデッシャ州政権であるビジュ・ジャナタ・ダルク(BJD)が9議席、そしてテランガナ州のテランガナ・ラシュトラ・サミティ(TRS)が7議席を有している。これらの州の1つでも自軍に呼び込めればBJPの上院での実質的な過半数獲得につながる。

モディにとって難敵は、農民に支持されるバナジー率いる西ベンガル州のAITMCだ。現状の州議会勢力は総議席294のうち214議席と圧倒的多数を擁し、一方のBJPは23議席しかない。既に今年4~5月に予定されている州議会選挙に向けてAITMC切り崩しが始

まっている。昨年12月17日には、AITMC州政府の大臣を務めた州議会議員スベンドゥー・アディカリ(50歳)が議員辞職をし、BJP入党をほのめかした。BJPは手回し良くアディカリの辞職翌日、内務省が管掌する中央予備警察軍による警護命令を同人向けに出している。その一方で24日には中央情報局が、バナジー側近でAITMC幹部ビナイ・ミシュラ宅を家畜密輸嫌疑で捜査を行い、同氏の海外渡航を禁じた。

そしてモディは甘い飴も用意する。オデッシャ州に対しては、BJD党首のナビーン・パトナイクが熱望する、宗教行事のお祭りで世界的に名高い都市プリーに国際空港建設支援にモディは応じる意向のようだ。

そして、モディはテランガナ州を落としたようだ。首相のK.チャンドラシェカル・ラオは12月12日、州都ハイデラバードを襲った大洪水への救済支援金135億ルピー(約212億円)の早期支給を嘆願するためニューデリーに飛んだ。ラオはモディとシャールに面談。それ以外にもコロナ禍や水害への支援金支給や灌漑施設からの取水量枠拡大などの要請を担当大臣に行ったようだ。ラオはニューデリーから戻ると、今までBJPが強硬に進める農業新3法に反対だった態度を一変させ、農民に背を向け政府擁護に回った。

生活に必要なインフラや支援金の提供の見返りに進行する独裁的政治体制は、富める者をますます富ませ、貧者救済の道は閉ざされたまま開かれる気配はない。旧態依然とした悪弊を残す過去からの脱却には、トップの不退転の意志が必要なことは言うまでもない。が、それが独断専行になった時、国は混乱する。実利さえ示せばいかなる信念をも変え得る、と妄信することの危うさをモディはまだ気づかないのだろうか。ここは、「抗い、農民を守るジャンヌ・ダルク」バナジーに期待したいところだ。(敬称略)